
夜想曲

山本 梢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜想曲

【Nコード】

N9884S

【作者名】

山本 梢

【あらすじ】

シヨパンの夜想曲を偏愛する「わたくし」は、或る平和で美しい秋の日に家の近くを歩いていた。ところが突然太陽が溶け出し、ベートーベンの交響曲が鳴り響き、「わたくし」が変質していく。

(2005年)

わたくしは或る秋の日に家の近くを歩いていたのでございます。冬が近付いていたからでございます。三時半だというのに陽が傾き始めていました。太陽はゆるい橙色に光り、わたくしを含めた全てのものを黄金に染めていました。時間までが何かの結晶のように輝き、その中で一歩一歩と踏みしめることそれだけで無常の喜びを感じました。わたくしの裸の首筋を吹きつける冷たい風さえも全体の美しい調和の一部をなし、気持ちよく感ぜられるのでございました。風の来た方角を見れば、そこにはまだ青い空がぼっかりと残っていました。

「陽が落ちて、あの青い空が深みを増して漆黒の天鷲絨ビロオケを纏い、星々の宝石で彩られたら、お姉様に夜想曲を弾いて下さいとねだりましょう。」

わたくしのお姉様は生まれながらの感性でもって、優美にそして大胆に鍵盤の上で指を滑らせてゆくのですが、とりわけシヨパンを偏愛しており、その中でも夜想曲に至っては遺憾無く彼女の天才が花開く次第でございました。

わたくしも夜想曲をとりわけ好み、日曜の夜に行われる演奏会（とは言っても夕食の後に家族がお姉様の弾くピアノの周りに集まりお茶を頂くという程度のものでした）の終わりには、既に一度弾いたにも関わらず、夜想曲の第九番をねだるのが常でございました。もし夜想曲を、その音の一つ一つを捉えて飲み物にし、それを糧として命を繋ぐことが可能ならば、どんなにか素晴らしいことではないでしょうか。

ところが、何処までも平和な懐かしい心象風景の中を歩いている

様なわたくしの幸福に、突然何事が起こったのでございます。もしかしたらわたくしはその時、振り返らなかつたら良かったのかもしれませんが。オルフェウスは振り返るといふ行為によつて妻エウリディケを永久に失つたのですから。しかし「もし」といふ仮定も虚しく、オルフェウスの悲劇を反復するように、わたくしも振り返るといふ大罪を犯したのでございます。

わたくしの眼に映つたエウリディケとは、膨張し始めた太陽でございます。太陽の周りの時空がもやもやと揺らぎ、太陽がそこへ侵食しある程度まで大きく大きく広がると、今度はどろどろと流れ出したのです。

溶ける太陽！！

あの雫が落つる地平では、どの様な地獄絵図が繰り広げられているのでございましょう。世界はとうとう終わりを迎えるのでございましょうか。わたくしを絡め取り、包み込んで。

わたくしは余りの恐怖に眼をつむり、何かが起こるのを、もしくは過ぎ去るのを、じつと耐えています。ところがいつから流れ出していたのか、どんどん音量が大きくなってゆくルートヴィヒの「皇帝」が、わたくしを間断無く責め立て、これでもかと押しこくるのでございます。その華々しく誇らしげで尊大な旋律が、かえつてわたくしをおののかせます。ルートヴィヒがナポレオンへの献辞を最終的には外したにも関わらず、「ボナパルト！ボナパルト！」と囁し立てる声までが混じり始め、それが次第に呻き声へと転じてゆくのでございます。

どのくらいそうしていた事でございましょう。わたくしが耐え切れなくなつて恐る恐る眼を開けると、辺りは薄闇に包まれておりました。わたくしはわたくしが変質しているのを感じました。確認する術を持たなかつたのですが、自分が透けてしまったように感じた

のでございます。

じつとりとした闇に身をゆだねているうちに眼が慣れ、わたくしは驚くべき事に気が付きました。わたくしはなんと、いつの間にかわたくし自身の部屋の中で横になっているらしいのです。わたくしが今までのわたくしと何処か違うように、わたくしの部屋も何かが変質してしまっている様でございました。

右を見ると、いつもわたくしの座っている椅子の輪郭がぼやけ出して、すうと壁の斜め上方へと消えてゆきました。その時のわたくしにとってその事は、何故だかとても自然に思われました。そして上から何かの雫がぼたりぼたりと落ちてきて、とこしえにわたくしを湿らせてゆきました。

それはまるで、ノクテユルヌ夜想曲というわたくしが到達したい一つの理想郷アンチの、逆ユートピアでございました。

また、窓を一枚隔てたわたくしの部屋の外では、海と空の境界が曖昧になってしまって、空だと思われるところにたくさん魚が泳ぎ出していました。その空には人が一生に見られる数を一度に集めたのではないかというくらいたくさん星が、各々勝手気ままにまたたいていました。その星々を、魚は上手くよけて泳ぎます。

ひととき大きく明滅する一つの星を選んでじいと思つめ続けていると、まるで星が動き出すかのように感じられるので、わたくしは何度も眼をしばいたのでございます。あの遠い星には何かがあるだろうか、生き物はいるのだろうか、熱いのだろうか、寒いのだろうか、喜びや悲しみはあるのだろうか、様々な疑問が取り留めもなく沸いては消えてゆきました。

気のせいではございませんでしょうか。そうしていると夜想曲が聞こえて来る様に思われるのです。そのか細い音を探り、辿り、それに身をゆだねるうちに、はっきりと音が聞こえ始め、まるでその旋律がわたくしであって、わたくしがその旋律であるように感じられてきたのでございます。わたくしは壁に消えたわたくしの椅子のように端

から徐々に溶け出して、夜空へと少しずつ沁み込んでいったのでございませぬ。

それがわたくしというものが仕舞いに全て消えて無くなるまで続いたかと思われる頃、空が白みはじめました。空と海とが分離してゆくのに気が付いた魚たちは、泳ぐか飛び込むかして、海へと戻ってゆきました。しかし空が完全に明けてしまった後に、それに気が付かなかったのか、それとも逃げ遅れたのか、一匹のくらげ海月がゆらゆら、うろろう、いつまでも浮遊していました。

その体に透ける空の青。

その海月とは、わたくし自身に他ならなかったのです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9884s/>

夜想曲

2011年9月20日00時09分発行